平成25年 野球殿堂入り表彰式

館長　廣瀬　信一

前号のニュースレターでお知らせの通り、特別表彰委員会選出の福嶋 一雄さんの野球殿堂入り表彰式を、8月15日㈭に夏の全国高校野球大会が開かれている甲子園球場で行いました。大会8日目、第1試合（聖光学院対福井商）と第2試合（熊本工対作新学院）の間で、終戦記念日に行われている日本高等学校野球連盟からの「育成功労賞」の表彰式後に行いました。

福嶋さんは、終戦直後の昭和22（1947）年、夏の全国中等学校優勝野球大会に小倉中のエースとして甲子園に出場し全5試合に完投、初優勝を飾ります。翌23（1948）年、新制高校初年度の夏の甲子園では小倉高校のエースとして5試合連続完封し、2連覇を達成しました。3連覇のかかる24（1949）年夏の準々決勝（対倉敷工）では肘を酷使した影響で惜敗しましたが、この時無意識に一握りの土をポケット入れて持ち帰ったことで、甲子園の土を最初に持ち帰った球児として語り継がれています。

表彰式は、夏の甲子園大会に相応しく、暑い太陽の日差しが照りつけるグラウンドで、満員の大観衆が見つめ、この日のためにお集まりいただいた大勢の小倉高校野球部の関係者が見守る中、あの思い出の土を持ち帰ったバックネット前で行われました。場内アナウンスでスクリーン映像の紹介とともに、小倉高校野球部の帽子を被った福嶋さんは、背筋をピンと伸ばされ、やや緊張した面持ちで久しぶりに聖地に立たれました。

はじめに、（公財）野球殿堂博物館・加藤 良三理事長より記念のレプリカが、次に（公財）日本高等学校野球連盟・奥島 孝康会長より花束が贈られました。続いて福嶋さんより、野球殿堂入りという最高の賞を受賞できた喜び、そして当時のチームメイト、先輩の方々、学校関係者の方々へ感謝の言葉を述べられ、また同時に受賞を機に微力ながら野球界の発展に尽力していきたいとのご挨拶がありました。最後に記念撮影が行われ、無事に表彰式を終えることができました。

左から　加藤 良三理事長、福嶋 一雄氏、奥島 孝康会長

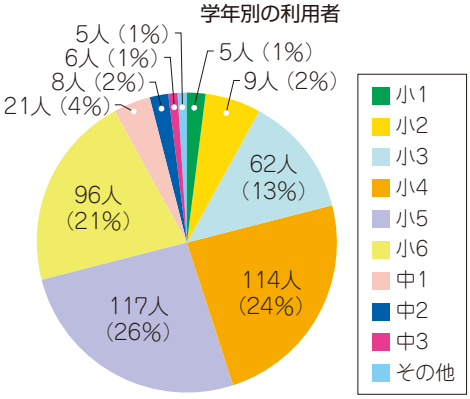
2013 夏休みイベント報告

「野球で自由研究！」&「ミニミニ実験コーナー」

7月20日㈯～9月1日㈰まで館内の図書室、企画展示室（7月27日～）、イベントホールを使い、野球をテーマに自由研究を行う小・中学生をサポートする「野球で自由研究！」を行い、野球の用具や歴史、野球場などに関する情報を提供しました。

「野球で自由研究！」で自由研究を行った小・中学生は467人で、前年と比べ9人増えました。学年別では、小学校4年生と5年生がそれぞれ114人、117人と100人を超え、6年生は96人となり、3学年の合計は全体の70%を占めました。

学年別の利用者



テーマ別

	歴史	野球場	用具					変化球	記録	その他
			用具	バット	グラブ	ユニホーム	ボール			
小1	3			3	1		4	1	1	
小2	6	1	2	5	6		7		2	2
小3	18	2	5	22	6	3	12	1	1	9
小4	36	5	6	26	23	1	19	2	3	14
小5	27	4	9	28	25	1	24	1	1	18
小6	30	4	7	16	11	1	18	5	1	13
中1	10	1	2	3	1		7			1
中2	4				1		1			1
中3				1			1	2		1
その他	1			1	2		1			3
合計	135	17	31	105	76	6	94	12	9	62

テーマ別では、今年も歴史と野球用具をテーマに選ぶ子どもたちが多く、歴史は135人（29%）、野球用具は312人（67%）、そのうちバットが105人、ボールが94人となりました。また、ミニミニ実験をヒントにして、変化球について調べる子供が目立ちました。

ミニミニ実験の様子

昨年に引き続き、プレゼンテーション企画「ミニミニ実験コーナー」を殿堂ホールで、7月27日～9月1日（8月12日、13日、14日を除く）まで毎日2回（14時～と15時～、それぞれ約30分）行いました。

14時の回は、①変化球のひみつ（風船や紙筒を使って、カーブの基本的な原理を説明）、②昔と今のグラブをくらべてみよう！（明治、昭和初期（ともにレプリカ）のグラブと現在のグラブを比較）、③イチロー選手のスパイク（2013年モデル。アシックス社より借用）をはかってみよう！（重さを量る。小・中学生限定で実際に持って、軽さを体験）

15時の回は、①硬式ボールのひみつ（ボールのルールの話。ボールの製造工程見本を使い、硬式ボールのできるまでを説明）、⑤阿部 慎之助選手のバット（ミズノ社より提供）をはかってみよう！（バットのルールの話と長さや重さ、太さを測り小・中学生限定で実際に持って、重さを体験）の5つを行い、34日間に約1,500人の見学者がありました。一生懸命メモを取るこどもや実験の内容をビデオに収めるお父さん・お母さんなども多く、実験終了後に図書室でさらに詳しく調べていく親子が目立ちました。

「親子グラブ製作教室」 8月12日㈪ 協力：ミズノ株式会社

今年は、抽選で選ばれた15組30名の親子が「親子グラブ製作教室」に参加しました。

当日はミズノ社スタッフ4氏のご指導のもと、約2時間かけてひも通しの作業を行いました。自由研究向けにメモをとったり、写真撮影をしながら作業をする親子も多く、各組ともお子さんが中心となって、世界でただひとつだけの自作グラブを見事完成させました。お子さんたちは、出来上がったグラブを早速手に取り、嬉しそうに感触を確かめ、大事そうにグラブをお持ち帰りになりました。

「バット製作実演」 8月13日㈫、14日㈬ 両日とも1日3回（11:00、13:30、15:00） 協力：ミズノ株式会社

当イベントは、2004年の開始以来10度目の開催となり、2日間で合計3,240名（前年比248%）のお客様にご来館いただきました。

渡邉 孝博クラフトマンに原料の木材やバット製作の工程についてのお話、バット製作の実演、紙やすりかけ体験（小学生3名限定）などを実施していただき、子どもたちは終始、カメラやノートを片手に真剣な眼差しで見学していました。また、質疑応答コーナーでは、自由研究目的のお子さんや野球ファンの方から沢山の質問があがり、渡邉さんが1つ1つ丁寧に答えて下さいました。プロ選手のバットを作っているクラフトマンの仕事の一端を実際に見て、削ったばかりのバットに触れたり、クラフトマンとの交流の機会を得られるなどの貴重な体験は、ご来館の方々にとって忘れられない思い出になったと思います。

殿堂入りの人々を語る (41)

1969年野球殿堂入り
苅田 久徳氏レリーフ

祖父・苅田　久徳

苅田　祥巳（よしみ）（1969年野球殿堂入り 苅田 久徳氏 孫娘）

私が、小さい頃は厳しい祖父でした。

実はその頃は、あまり祖父と話しをした記憶はないのです。

母の実家に行けば、私も妹もまだ子供ですから、はしゃいだり走ったり、大きな声を出したり…そうすると祖父のバクダンが落ちるのです。でも私はその家が大好きで、学校も歩いて近いところにあったので、毎日のように寄って夜には母が車で迎えに来てくれて帰っておりました。

こわーい祖父がいるのに何故って思われそうですが、それには理由がありました。

毎回ではないのですが、祖父は料理が得意で、特に大好きだったのがボルシチでした。それはそれは本当においしいボルシチでした。その時の祖父は、とてもやさしく笑顔で私たちに「おいしいかい？」と話しかけてくれたのです。

あとは、よくお庭にいる事が多く、植木や花を色々育てていたのを覚えております。

祖父の現役時代は、写真または映像で何度か見たことはありますが、詳しくは知りません。その頃の話で知っているというか、聞いたことがあるのは「隠し球」「名二塁手」と「苅田の前に苅田なく、苅田の後に苅田なし」私にはよくわかりません。でもこの言葉どおりの選手だったのでしょうね。

「隠し球」は日本プロ野球史上初めてだったとか…。「名二塁手」は、昔あるアナウンサーがテレビで言っていたのを覚えております。球を取ってから投げるまでの時間が、あまりにも早すぎて驚いたこと。あと退場も多かったとか…。

祖父の殿堂入りの表彰式のことは覚えております。あの時、私は９歳でした。後楽園球場に足を運び、あの日は私のいとこがマウンドで表彰式に一緒に出ており、実は本当は私がその場所に居て除幕する予定だったのですが、野球だからなのか女の子より男の子の方が、という事で急きょ変わったと聞いたような気がします。正直、私がその役目をやりたかったのでとても残念だったのを覚えております。

私が成人になってからもよく家に遊びに行きました。相変わらず私たちと交わす言葉は少ないですが、私を見るなり満面の笑みで右手を高く上げ、それが祖父の「よく来たね」って言う意味のポーズだったと思います。

今はネットの時代。パソコンで“苅田 久徳”と検索すれば、祖父の輝かしかった活躍がいろいろ出てきます。私の母に言わせれば「当り前でしょ！私の方がお父さんの事、よく知っているんだからね。」母が現役時代を知っているのは当然の事です。

このお話をいただいた時には母と二人、祖父の話で盛り上がりました。今回はもちろん、私の中に居る祖父との思い出の他に、母から聞いた私が知らなかった祖父のプロ野球選手時代のことも書かせていただきました。

祖父は私にとって本当に自慢の「おじいちゃん」であり、素晴らしいプロ野球選手であったことを心から誇りに思います。

これからも、活躍されていらっしゃる素晴らしい選手の皆様のことを、蔭ながら応援しております。そしてプロ野球界の益々のご繁栄を心よりお祈り申し上げます。

知ってほしいこんな資料（83）

1934年日米野球のポスターの作者・広瀬 貫川

今回ご紹介するのは、1934年日米野球のポスターとベーブ・ルースが一緒に納まっている大変珍しい写真です。中央のポスターは、同じ絵柄のものを当館でも所蔵していますので、ご覧になった方も多いのではないでしょうか。日米野球の交渉役として渡米した鈴木 惣太郎氏（1968年殿堂入り）が、当初来日に難色を示していたベーブ・ルースにこのポスターを見せたところ、ルースがふふふっと笑い、来日を承諾したというエピソードが残されており、このポスターのおかげで「野球王」ベーブ・ルースの来日が実現し、日米野球に日本中が盛り上がったとも言えます。

その日米野球から38年が経った1972年11月、ポスターの作者・広瀬 貫川画伯が、当時後楽園球場に隣接する場所に建っていた野球体育博物館（現・野球殿堂博物館）に来館しました。その際、当館では、広瀬氏が持っていた写真を二枚複写させていただきました。この写真はその内の一枚で、ルースとポスター、そしてその作者・広瀬氏を結びつける大変貴重な資料です。米国チームが滞在していた帝国ホテル旧本館（通称「ライト館」）を背景に、左から広瀬氏、鈴木 惣太郎氏、ルース、堀口 恒男氏が写っています。前列右の男性が誰であるかは分かっていません。堀口氏は「ピストン堀口」の名前で知られる戦前・戦後の日本ボクシング界のスターです。当時の大野 純二館長が広瀬氏から聞いたところによれば、堀口氏は日本を代表するプロスポーツ選手としてルースに会ったとのことです。1934年当時、日本にはまだプロ野球はなく、ボクシングが人気のプロスポーツだったからだそうです。なお、もう一枚の写真には、向かい合ってボクシングの構えをとるルース、堀口両選手、そして二人の間に立ち、レフェリーの真似をする広瀬氏が写っています。二枚とも広瀬氏所有写真を示すように、「貫川」のサインが入っています。

広瀬 貫川（本名・広瀬 一郎）氏は、1898年８月に島根県隠岐郡海士町に生まれ、小学校を卒業後14歳で上京し日本画を修得しました。23歳まで舟精堂図案所に勤め、1930年には東京・京橋に日本デザイン社を設立し、挿絵やポスターを数多く手掛け、当時まだ新しかった商業美術の分野で腕を振るいました。今回、日米野球ポスター製作のいきさつなどの情報を求めて、隠岐の島町図書館、教育委員会のご協力により、ご親族からお話を伺う機会を得ましたが、残念ながら詳細を把握するには至りませんでした。日本デザイン社は、大会主催者・読売新聞社の社屋があった銀座三丁目の近くに位置していたので、当時両社には何らかの接点があったのかも知れません。

なお当館の所蔵する日米野球のポスター２枚は神宮球場大会と甲子園球場大会のものですが、この他にも近年、横浜球場大会のポスターも確認されました。絵柄はほぼ同じですが、会場名の他にレイアウトが若干異なります。この年の日米野球は12都市（函館、仙台、富山、宇都宮、大宮、東京、横浜、静岡、名古屋、大阪、京都、小倉）で開催されました。今後、他球場大会のポスターやポスターにまつわる情報が新たに発見されるかもしれません。

学芸員　篠塚　真理子

コラム／博覧・博楽 (44)

私にとって野球殿堂博物館は情報の宝庫

田中　進一（野球殿堂博物館　維持会員）

野球殿堂博物館はタイムマシーンだ。夕涼みの縁台だ。「一人優越感」と「仲間感」に浸れる場だ。

子供のころに初めて父親に後楽園球場に連れて行かれた。入口から階段を登ると土色のグランドとカクテル光線に生えた芝生が見えた。まるで小窓を開けた途端に一斉に光が射してきたようだった。美しかった。この感動が野球を好きになる始まりだった。それから55年が経った。今も、野球場に通う。そして、仕事を引退して、審判員のキャリアを調べに野球殿堂博物館に通い始めた。

博物館の玄関で入館パスを見せる。階段を降りて右に曲がる。図書室の入り口が見える。子供時代に見たあの野球場の小窓のようだ。

球場は静かだった。いまのようにドンチャカでなかった。「ああ～」という観衆のため息と「ワア～」というどよめきだけだった。後楽園球場に私はいた。別当 薫選手がチャンスに打席に立った。そのとき球場は静かで観衆の息は止まっていた。次の瞬間ヒットを打った。どよめきと拍手。野球殿堂博物館で別当 薫さんのユニフォームを見た。そのとき、私はタイムマシーンに乗ってこの後楽園球場の少年時代に戻った。そんな記憶を蘇らせてくれた。

それが野球殿堂博物館だった。

夏休みに少年と母親がボールの反発力を比較する自由研究の切り口を決めかねていた。私は少年と母親に話しかけた。「坊や、バレンティンの今年と去年の本塁打飛距離を比較したらボールの反発力が上がったことを証明できるかも……」。こんな会話をした。いまや大人が子供に声を掛けると不審者に見られる時代だ。この野球殿堂博物館では年の差なく爺ちゃん（私）が少年に声を掛けられる。そう昔、こんな風景があった。夕涼みの縁台で爺ちゃんと子供は会話していた。そんな時代を蘇がえさせてくれた。

それが野球殿堂博物館だった。

2013年９月10日、ヤクルト対広島戦。先発メンバー発表で「三塁塁審 長井 功一」と発表された。これは一軍初出場では……。早速、ノートパソコンを立ち上げる。野球殿堂博物館で入力している審判員のデータを開いて確認する。確かにそうだ。５回裏、審判員小休止のときに「一軍初出場おめでとう」と声を掛ける。軽く会釈を受ける。この事実を知っているのはこの日の観衆は17,883人のうち私一人だけ。「一人優越感」に浸った。

これも野球殿堂博物館に審判員資料があったからだ。

2013年９月15日、ついにその日が来た。バレンティン選手の56号本塁打。この日、王選手が55号本塁打を打った日の新聞記事を携えていた。いつもヤクルトを応援する仲間がいた。今日初めて会ったメモリアルデーに立ち会いたいファンがいた。この新聞をヤクルト仲間とメモリアルファンに見せる。土砂降りの雨の中55号を打った王選手が写っている。「この年に東京オリンピックが行われた。今から49年前のことだ」と教える。そんな昔だったのかとみんなびっくりする。バレンティンが56号本塁打を打った。その瞬間、仲間とファンは一瞬に心が通じ、ハイタッチ、ハグをする。たった１枚の切り抜き記事で昨日まで知らない人間と一緒に喜んだ。言葉がなくても心が通じる野球場は「仲間感」を浸れる場なのだ。

これも野球殿堂博物館に王選手の55号本塁打資料があったからだ。

因みに、この日、球審をした笠原 昌春審判員にとって1999試合目だった。この事実を知っているのはこの日の観衆30,319人のうち私一人だけ。この日「仲間感」と「一人優越感」の両方に浸った。

今日も野球殿堂博物館に通う。タイムマシーンに乗れるし、「一人優越感」、「仲間感」に浸れるから…。

こんにちは図書室です

日本体育週報社と「体育週報」

今回は図書室で所蔵している戦後に日本体育週報社が発行していた「体育週報」をご紹介いたします。

戦後初となる「体育週報」は臨時号で縦25cm、横17cm、わら半紙に手書きのガリ版刷り４ページで、1945年12月１日に発行されています。編集兼発行人は大野 堅志となっています。

体育週報　1945年12月１日発行　臨時号

この臨時号には、11月18日に神宮で行われた全早慶戦のランニングスコアや、関西で行われていたと思われる全神戸、全大阪、全京都のリーグ戦のスコアが掲載されています。また、１ページを使って、11月23日に神宮で行われたプロ野球の東西対抗戦を詳細にレポートしています。

1946年１月１日に「体育週報」550号が大相撲決算号として16ページで発行されます。その編集後記に大野は戦争中の事をこう書いています。

“３月13日夜半に大阪を見舞った初の大空襲に本社もその戦災を受けた一人だった。…中略…残念なことにはこの号に掲載されていた日本野球秋の総記録と六大学19年史の最終回記事の原稿まで印刷所の焼失と共に灰塵に帰し、再発行するにも不可能となった。而も相当数の用意された用紙を犠牲にしたのであるから本社としては致命的な打撃を蒙った。”

戦時下で雑誌を作っていた時の状況が生々しく書かれています。

しかし、編集後記の最後には次のようにも書いています。

“一行一句に当局の眼の色を伺うことの不必要となったことは何よりである。…中略…本紙は従来通り体育週報としてその内容も野球と相撲を満載し、全国の愛好家のよき伴侶となって進む方針である。”

この言葉通り、「体育週報」は1946年には本誌、臨時号をあわせて22回出版されます。

「体育週報」は大阪で発行されていた野球新聞「ベースボールニウス」の改題だとおもわれます。「ベースボールニウス」は以前このコーナー（Vol.18, No.3　2008年10月25日発行）でご紹介をしましたが、1932年に発刊され、発刊の辞は「体育週報」の発行人でもある大野 堅志が書いています。当館では「ベースボールニウス」を1937年２月（200号）まで所蔵していますが、「ベースボールニウス」がいつの時点で「体育週報」に名前が変わったかは、わかりません。

日本体育週報社は1946年６月から「体育週報」に加え、雑誌「ベースボールニュース」を発行します。はじめ週刊でしたが、隔週になり、「体育週報」と交互に出版されていました。1947年５月１日の発行から「体育週報」は発行をやめ、「ベースボールニュース」が週刊で発行されるようになります。大野 堅志編集兼発行人の「ベースボールニュース」は第708号（1952年11月20日発行）まで続き、戦後の野球界の試合を調べるのに、貴重な雑誌となっています。

図書室では戦後すぐに大阪で発行されていた「体育週報」を読むことが出来ます。どうぞご覧ください。

司書　茅根　拓

「12球団ファンクラブ会員様無料招待デー」開催！

野球殿堂博物館では、今年もプロ野球12球団の各ファンクラブ会員様へのサービスとして、「招待デー」を開催しました。ユニホームの展示や日本シリーズ等の上映、マスコットの来館など、当日限定の様々なイベントを実施しました。各球団から会員様への告知の効果も大きく、今年は合計で2,659名のファンの皆様にご入館いただくことができました。

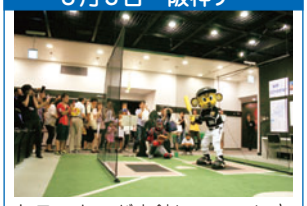
7月24日　広島デー

スライリーが来館し、今年殿堂入りの広島OB・外木場氏、大野氏の特別展の前で記念撮影。館内をまわって沢山のファンと交流しました。

図書室では過去のファンブックを展示し、沢山のファンが閲覧しました。

8月1日　ヤクルトデー

8月3日　阪神デー



トラッキーが来館し、ファンとの記念撮影やバッターボックス体験をしました。

歴代ユニホームの展示に多くのファンが見入っていました。

8月15日　横浜デー

※7月23日以前に行われた8球団の模様は、前号でご紹介させて頂きました。

来季もファンの皆様に、また来よう！と思って頂けるような企画を実施したいと考えています。

野球殿堂博物館 トピックス（2013年7月下旬～10月編）

【7月21日】大野 豊氏が来館！

大野 豊氏（2013年殿堂入り）が来館され、「平成25年 野球殿堂入り特別展」や館内展示をご覧になりました。また、館内見学中の岩手県大槌町の少年野球チーム「吉里吉里野球スポーツ少年団」へ激励のメッセージを頂き、記念撮影を行いました。

【10月3日】バレンティン選手が来館！

ウラディミール・バレンティン選手（ヤクルト）が来館しました。

ボールとスパイクの前で記念撮影

バレンティン選手は、当館エントランスホールで展示中のシーズン最多本塁打日本新記録となる56号ホームランボールや、記録達成時に使用していたスパイクなどを背景に記念撮影を行い、その後館内を見学されました。

【7月21日】外木場 義郎氏が来館！

外木場 義郎氏（2013年殿堂入り）がご家族と来館され、「平成25年 野球殿堂入り特別展」や館内の展示を見学されました。

【10月9日】侍ジャパン代表監督発表記者会見開催！

当博物館の野球殿堂ホールにおいて、侍ジャパン代表監督発表記者会見が開催され、小久保 裕紀新監督が来館しました。

博物館からのお知らせ

▶理事会

10月8日㈫午前11時より、東京ドームホテルにて開催し、下記の議題につきまして承認いただきました。

議題1．表彰委員会規程の一部改正について

▶販売中

ポストカード、キーホルダーのご紹介です。ご来館記念に、お土産にぜひお求めください。（通信販売もいたしております）

●2013年殿堂入り記念ポストカード（5枚セット）　500円（税込）

今年殿堂入りされた3氏のレリーフのポストカードです。限定100セットですので、お早目にお求め下さい。

（セット内容）※100セット限定

- 大野 豊氏レリーフ
- 外木場 義郎氏レリーフ
- 福嶋 一雄氏レリーフ
- 殿堂ホール　・博物館入口
- 博物館オリジナル封筒

●キーホルダー　500円（税込）

硬式ボールに使用した牛皮の端切れで作ったオリジナルのキーホルダーです。

素材：牛革貼合　サイズ：100mm×40mm
着色：グリーン　箔押し：金色

博物館のご案内

場　所	東京ドーム21ゲート右
開館時間	3月1日～9月30日　AM10時～PM6時 10月1日～2月末日　AM10時～PM5時 （入館は閉館の30分前まで）
入館料	大　人　500円（300円） 小・中学生　200円（150円） 65歳以上　300円 （　）は20名以上の団体
休館日	月曜日（祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館） 年末年始（12月29日～1月1日）

《11月・12月・1月の休館日》

11月　11日・18日・25日～30日
12月　1日・2日・9日・16日・29日～31日
1月　1日・6日・20日・27日

※11月25日～12月2日まで、館内工事のため臨時休館いたします。
ご迷惑をお掛けしますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

●編集後記　毎年10月ころから、野球殿堂入りを決める表彰委員会の準備が始まります。
野球殿堂入り記者発表の日程などは、当館ホームページで告知予定です。

野球殿堂博物館 Newsletter 第23巻 第3号
2013年10月25日発行（年4回発行）
編集・発行　公益財団法人 野球殿堂博物館
（旧・財団法人 野球体育博物館）
〒112－0004　東京都文京区後楽1－3－61
Tel 03（3811）3600　Fax 03（3811）5369
http://www.baseball-museum.or.jp/

リレー随筆(54)

競技者表彰委員会委員　　佐野　俊郎（報知新聞社）

2013年はまれに見る記録ラッシュのシーズンとなった。「世界の王」巨人・王 貞治が東京五輪開催の1964年にマークした年間本塁打記録55本を、ヤクルト・バレンティンが49年ぶりに更新。球団初のリーグ優勝を飾った楽天のエース・田中 将大の開幕24連勝も圧巻だった。それと海の向こうの話だが、絶対に忘れてはいけないのがヤンキース・イチローの日米通算4000安打だ。

8月23日付けのスポーツ各紙は、天才打者の偉業を多くのページをさいて報じた。その日は夏の高校野球決勝（前橋育英の初優勝）に、歌手・藤 圭子さんの転落死など様々なニュースがあったが、バリューからして文句なしのトップ扱いだった。

コツコツと積み上げて到達した大台。各紙ともメジャー担当が中心となって準備した企画で紙面は充実していた。イチローも試合後の記者会見で40分超に及ぶリップサービス。長文の一問一答は名言満載で読み応えがあった。ただ、本紙（スポーツ報知）の10行ほどの雑感が、私の胸にグサリときた。

「プロ初安打は記事がなかった」という見出し。以下のような内容だ。

> ○…イチローのプロ入り初安打は、92年7月12日のダイエー戦（平和台）だった。デビュー2試合目。「9番・左翼」で初めて先発出場し、5回に木村 恵二投手から右前に運んだ。しかし、当時のスポーツ報知最終版には雑感記事すら載っていなかった。

実は、その時のオリックス担当記者は他ならぬ当方。イチローになる前の「鈴木 一朗」は高卒ドラフト4位入団とはいえ、1軍首脳陣の間では「2軍にセンス抜群の打者がいる」と、将来の1番候補として期待されていたという記憶があったから、1字も報じていないのは合点がいかなかった。早速、パソコンで本紙のデータベースにログイン。その日の紙面を検索してみた。

1面は「駒田先制弾などで鯉粉砕！ 首位ガッチリ」と、もちろん巨人。「新庄2発でトラ3位復帰」も、ウチにしてはそこそこの扱いだ。肝心のオリックスは4面。「シュルジー3勝」、「土井さん快勝に上機嫌」などの小見出しはあったが、確かに鈴木の「す」の字もない。大阪版にもなかった。ひょっとして先輩の遊軍記者に博多出張を奪われたのかも…。そこで、押し入れの段ボールに入れてある当時の日記を引っ張り出した。

該当のその日、私は平和台球場の記者席にいた。日記には「勝ったけど原稿なし」などと書いているから、記念の一打を取るに足らないことと判断したのか、どうやらデスクには強く売り込んでなかったようだ。

21年前の眼力のなさには自責の念に駆られるばかりだが、さて本人はそのプロ第1歩をどう感じていたのか。4000安打達成の記者会見で、プロ初安打についてこう話している。

「球場が沸いた？ 沸くわけないじゃないですか。味方のベンチだって、そんなのないですよ。18歳の野球小僧がね。むしろ、つぶしてやりたいくらいでしょうね。そりゃ気に食わないと思いますよ。18歳で7月に1軍に来てヒットなんて、うれしくないでしょ。きっと。だから3年は、という思いがあったんで。なんで3年かというと、4年後には大卒で同じ年齢の選手が入ってくるので、3年間で自分をきっちりつくって、4年目でレギュラーを取ってというプラン。5年目では遅い。高校卒業で、そういうプランがありました」

イチローらしい言い回しだが、高校を出たばかりの少年はしっかりと先を見据えながら、一時的な感激、感動には浸ってなかったようだ。

136安打、打率2割6分2厘、20盗塁の自己ワーストの成績で、メジャー13年目の今季を終えた。「もう1周やりたい。もう162試合やりたい」と言い切るベテランは、身体も気持ちも衰え知らずの「野球小僧」のままだ。40歳で来季を迎えるが、「50歳で5000安打」をも視界にとらえているという。まんざら夢物語でもない。キャリアの最後は日本球界に復帰してもらい、国内の野球ファンとともに「最後の安打」こそ、しっかりこの目に焼き付けておきたい。